

英語を話すことはかっこいいのか？：日本の幼児の国々に関する知識と外国語に対する態度

久津木 文

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部

ayakutsuki[at]shoin.ac.jp

Is it Cool to Speak English?: Japanese Preschoolers' Knowledge of other Countries and Attitudes towards the Foreign Language

KUTSUKI Aya

Kobe Shoin Women's University Faculty of Human Sciences

Abstract

本稿では幼児期の日本の子どもを対象に外国や日本といった国や外国語である英語についての知識と英語に対する態度を調べその発達的な変化と関係を検討した。その結果、国や英語に関する知識は全般的に4歳から6歳の間に伸びることが判明した。英語に対する態度については、4歳児群から5歳児群の間で差がなく、この時期の子どもは英語を話すことを全般的にポジティブに評価しており、すでにこの時点で社会における英語に対する価値観が影響している可能性が示唆された。日本や外国についての知識と英語に対する態度との関係をみたところ、5歳群ではよりそのような知識が高い子どものほうが英語を話すことがかっこいいかを判断できないと答えることが判明した。つまり、国や人々の理解が高まることによって5、6歳以降から一部の子どもの偏った態度は弱まることが示唆された。

The present study investigates Japanese preschoolers' knowledge of Japan and foreign countries and English and their attitudes towards English and their relationships. The findings suggest that the knowledge about countries and the foreign language increase from four to six of age. There was no difference in attitudes towards the foreign language: children at these ages had positive attitudes towards the ability to speak the English language, suggesting the existence of the influence from the value the society places on the English language on children's attitudes at

this early stage of childhood. When compared with their knowledge of countries, some children from the five-year-old group showed inability to judge whether it is cool to speak the English language. This suggests the biased attitude towards the English language weakens around the age of five and six onwards as they become more knowledgeable about other countries and people.

キーワード: 幼児期, 態度, 英語, 日本

Key Words: attitudes, English, Japan, preschoolers

1. 問題

日本国内において幼い頃からの英語教育や異文化理解教育の重要性が長い間強調されているものの、幼児期から実際に外国人と頻繁に接触して育つ子どもは欧米に比べると限られているといえる。早期からの英語教育や多文化交流が多文化・異文化理解を促進すると考えられているものの実際にその効果を検証した研究は非常に少ない。多くの場合は小学校や中学校の授業に外国人を招き英語で話してみたり、外国の料理や文化を紹介してもらう等の交流を行った教育実践の報告に留まっている。

なかでも、日本の幼児の自分の文化や他の国の文化の理解がそもそもの程度あるのかや発達的な変容ついての実証的な研究は非常に少ない。恐らく多くの他の認知的能力のように、早期から自文化・他文化の特徴を察知する能力が存在し、それが成長とともに環境から得られた情報によって変化するなかでそれらに対する態度が形成されるのだと考えられる。

子どもの自文化や他文化理解に対する評価や態度の発達について関連する理論としては、内集団・外集団に対する態度の形成に関するものがあるが、立脚する領域によって捉え方がかなり異なる。とりわけ、内集団・外集団という観念自体がどちらかという社会心理学の領域のものであることもあり、認知発達からの観点や、初期の発達の変化や状態について言及するものは少ない。その一方で、子どもの認知に焦点をあてるものでは、社会や環境の影響については詳しく言及されていない。例えば、初期の認知発達の役割を強調する理論として Cognitive-developmental theory (CDT) (About, 2008) が存在する。この理論は、子どもの内集団に対する態度は認知と社会認知的な発達に基づくというピアジェの発達理論に沿ったもので7歳まで子どもは自己への中心化が強くなり、己と特徴を共有する国や民族等に選好があり結果的に異なる特徴をもつものに対しては偏った見方を示すと説明する。このような認知的偏りは成長とともに減少するとされ、12歳頃には内集団に対してよりネガティブに、そして外集団に対してよりポジティブな評価をするようになり、両集団に対する偏見が減少するとされる。この理論の問題は先にも述べたように子どもの偏見や外集団に対する態度の形成が基本的に普遍的な認知発達の産物であると捉え、文化や個人によって異なる環境からの要因を考慮していない点であろう。これに対して Social identity developmental theory (SIDT) (Nesdale, 2004) は環境の役割を強調する。これによれば2歳から3歳まで子どもはまだ他の人種や国についての情報に敏感ではなく、3歳以降にならないとそれらに気が付かないとされ、4歳になって初めて内集団を好む(しかしこれは外集団を差別したり嫌がったりではない)ようになり、これ以降外集団にも興味が向

くようになるとされる。しかし、特に内集団と自己同一化が進んでいる場合や、外集団に関するネガティブな評価や価値観が社会に浸透している状況では、単に内集団を好むという選好の偏りから次第に態度が形成されるようになると説明している。CDT では内集団に対する選好が成長によって緩んでいくと仮定するのに対して、この理論では初期にはそもそも人種等の違いに気が付いていないため元々は選好の偏りはなく、選好や態度の形成は社会や環境からの影響によるものと仮定している。しかし人間の子どもが発達の早期の段階で己の属する集団の特徴について無頓着であるという考え方は近年の認知発達研究の見解には沿わないものである。近年の研究では、人間が生き残る基本的なメカニズムの一部としてかなり早い段階から己が属する人種的・言語的集団の特徴の敏感であり、結果的に選好性を示すこと (Bar-Haim, Ziv, Lamy, & Hodes, 2006; Kinzler, Dupoux, & Spelke, 2007 等) が明らかになっている。

よって、認知一般的に人間の子どもは非常に早期から自分と同じ特徴をもつ集団とその特徴を選好するが、成長とともに環境や社会から情報を得るなかで内集団と外集団の対比が可能となり、評価や態度が形成され変化すると考えるほうが妥当であろう。

子どもの外集団に対する態度に影響をおよぼす環境からの情報として親や家族からのものが非常に力強いといわれる。例えば、児童期以降、歴史、地理、外国語や文学といった教科を通しての影響は強い (Apple, 1993; Schleicher & Kozma, 1992)。教科書や授業を通して伝達される情報は社会で浸透している価値観や態度を含んでいるからである。よって、単に外国語や地理を学んでいるだけのつもりであっても、いつのまにかその言語を話す国の人や文化についてのイメージが伝達されてしまうのである。さらに年齢が低いほど環境の影響は強いといえる。例えば、Kutsuki and Tanaka (in press) では小学校の全学年を対象に外国人の文化的逸脱行動の評価をさせ、その評価に影響を与える要因を検討している。著者らの結果によると、小学校低学年の子どもの評価のみに、本人の海外滞在経験のほかに文化や国についての親による語りが含まれていたが高学年や中学年では含まれていなかった。

より若い時期、幼児期の段階であっても特定の民族や国に対する偏ったネガティブな情報が社会的に浸透してしまっている状況においては、子どもはそれを吸収し、自国や自民族を好み、特定の民族や(歴史的に敵であった民族)・国(歴史的敵国)に対してはネガティブな態度を示し評価を下すことがわかっている (Bar-Tal, 1996; Bar-Tal & Teichman, 2005)。子どもの外集団に対する評価や態度の形成についての研究は、欧米等の多民族国家で行われてきたものが多くその社会的・歴史的背景からマイノリティに対するステレオタイプの形成であったり、対マジョリティ、対歴史的敵国や民族といった構図が前提として存在するものが多い。しかし、実際には他の国や民族を好むようになるという結果も存在する (Middleton, Tajfel & Johnson, 1970)。これらのことから、それがポジティブであろうとネガティブであろうと社会的価値観が幼児にも伝わり態度の形成に影響を与える可能性が十分考えられる。

日本の子どもの外集団、つまりは外国の人に対してやその出身国や特徴に対する態度の形成についての研究は実のところほとんどない。しかし上記に説明したような明確な

敵国や敵民族の社会的価値観が子どもに浸透している状態では現在のところないだろう。情報的に量が多い英語や欧米の国々に絞って考えると、日本ではどちらかというと、外集団の言語である英語やそれを話す外国の国々に対してある種、特殊な価値観が浸透しており、子どもの態度が影響を受けているのではないだろうか。

例えば、山本 (2009) は日本において英語が公用語でないにもかかわらず、その社会的価値は非常に他の言語と比較して高く、それが生まれながらにして話せるネイティブ (特に白人) や英語が話される国々 (といっても恐らくはアメリカ人やイギリス人) に対する憧れは非常に高いことを指摘している。さらに、山本 (2009) に引用されている斎藤 (2001) では、日本では「英語ができるのがかっこいいと考えたり、西洋ブランドを持って優越感に浸る日本人は必ずおり、・・・(略) この国ではまかり通っている。西洋による日本の「精神支配」、 「英語神話」による日本人のマインド・コントロールは静かに根強く進行している」 (p. 119) と述べられている。つまり、日本で暮らす多くの日本人にとって、「英語」を話すことや「英語を話す国」はポジティブなイメージをもっており、その価値観は社会にかなり浸透しているといえるだろう。

しかし他方では、認知一般的に子どもは内集団言語である母語や母語話者を選好することがわかっている。例えば、生後直後からすでに母語を選好すること (Mehler, Jusczyk, Lambertz, Halsted, Bertocini & Amiel-Tison, 1988; Moon, Cooper & Fifer, 1933) や乳児期から幼児期にかけて母語話者を長く注視したり (Kinzler, Dupoux, & Spelke, 2007) , 母語話者が遊んでいたおもちゃ (Kinzler, et al, 2007) や食べ物を選ぶ (Shutts, Kinzler, McKee, & Spelke, 2009) ことが報告されている。人間がさほど地理的に移動しない時代において言語と文化やそれに付随する知識は関連性が高かったことがこの早期の選好の偏りの背後にはある。己の母語と相手のものが同じかどうかを見極めることができれば、その人物が同じ文化に属しているかも同時に判断でき学習はより効率の良いものとなり幼い子どもにとってとても都合が良い。

母語の識別のみならず、他の言語的な特徴や情報についても幼児はかなり敏感である。例えば、幼児は母語であっても外国語のなまりで話す話者に対して母語話者とは異なる期待をもつことがわかっている。Kinzler, Corriveau, & Harris (2011) ではアメリカに暮らす幼児を対象に、スペイン語なまりの話者とネイティブの英語話者とでは後者をより言語的情報以外でも信頼するという結果を得ている。

さらに Brosseau-Liard & Birch (2010) では言語的知識が不足している (言語的間違いをする) 人物について幼児が期待する言語とは関係のない知識や社会性等といった特徴について調べている。結果によれば4歳はそうでもなかったが5歳は言語的知識の不足を他の領域の能力や特徴に過度に汎化させた。具体的には、言語的な間違いが少ない人物は社会的にも好ましいと捉えた。この時期の子どもにとって言語的知識はその人物の言語以外の能力や特徴を推測するのに重要役割を果たしていることがわかる。

以上の研究の結果を総合的に解釈すると言語的情報は内集団と外集団を区別するかなり力強いマーカーであり幼いころから敏感に感じ取ることができるものであり、それに基づいて外集団に対する期待や態度を形成している可能性がある。そして母語話者が選好

され優れていると判断されている事実や発達一般的にみられる幼児期の内集団への選好を考慮すると、外国語話者に対する評価の低さは母語話者に対する過剰な選好に起因すると解釈できる。しかし、日本で暮らす幼児は少し様子が異なるのかもしれない。

Brosseau-Liard & Birch (2010) 及び Kinzler et al. (2011) で得られた方法を参考に Kutsuki (2013) は日本人の幼児を対象に外国語を話すパペットと日本語を流暢に話すパペットを設定し、パペットの言語的な優位性が言語的情報と非言語的情報である事物の用途の知識や道徳性といった特徴にどの程度汎化されるかを調べている。その結果、日本人の幼児は外国語話者の言語的エラー（日本語が理解できないこと）を他の知識や特性の評価に取りあまり入れることはなかった。つまり日本人の幼児にとって、外国人の日本語知識の不足の情報、つまり言語的に劣勢である情報はその人物の信頼性を表すマーカーとして機能しなかったことになる。方法が先行研究と全く同じではないため直接的に比較はできないものの、このような結果の要因として Kutsuki (2013) は、アメリカにおけるスペイン語なまりと日本における外国語を話すことや外国語話者の社会的な価値観について議論し、アメリカの幼児は普段からスペイン語なまりを含め様々な自分とは異なるなまりを聞いて育っており、どちらかというポジティブではないイメージを形成している可能性があるのに対し、日本の子どもは聞いたことのない外国語（実際にはスペイン語が用いられた）を聞いても、それに関する経験や情報もなくそもそも評価ができなかった可能性を指摘している。さらには何人かの幼児が「この人形は英語を話してるからかっこいい！」というような発言をしたことから、日本に暮らす幼児にとって外国語とは英語であり、英語を話す人は優れているという社会的価値観がすでにある程度浸透している可能性が浮上する。

このように、環境から得られる情報の影響によって子どもの知識と態度は変化すると考えられるが、知識の質によってその影響は異なるようである。例えば、実質的な異文化交流や異文化体験が限定的な状態で得た知識である場合、異文化や外国人に対する過剰にポジティブな態度形成がされることが日本の帰国生指定校の小学生を調べた塘 (1999) や日本の国際学校の小学生を調べた Kutsuki and Tanaka (in press) でも報告されている。つまり、異文化に関する実質的な経験や知識をもつ子どもの態度のほうがより現実的でフェアな理解を示すのである。

以上のことを踏まえたうえで日本の幼児の異文化や外国語に対する知識や態度を考えると次のようになる。一般的に日本に暮らす幼児は異文化に対して表面的で限定的な知識を得ており、さらに社会全体において外国（特に英語を話す国々）に対する高い価値観が浸透していることからその影響も受け幼児期から外集団（異文化）ではあるものの外国人や外国語に対してポジティブな態度が形成されている。そしてその態度は年齢を重ね関連する知識を得ていくなかでより偏りの少ないものに変化するのだろう。

上記の可能性を検討するため、外国語である英語を話すことに対する幼児の態度と国や英語についての知識との関連と発達の変化を検討する。本稿では日本において社会的価値が高い言語であり幼児でもそれが何かを理解している可能性が高い英語に焦点を絞った。

2. 方法

K市内にある保育園の4歳児クラス及び5歳児クラスに子どもを通わせる保護者へ調査の目的と参加者の権利等を説明したうえ承諾を得た子どものみを対象に調査を行なった。この保育園は特に英語教育や国際理解教育を行っている園ではなかった。

参加者

合計49名が実験に参加し、そのうちデータとして分析可能なデータが収集できたのは45名であった。総数45名(平均年齢 = 5.76, SD = .69), 4歳クラス(N = 21, 平均年齢 = 5.13, SD = .42), 5歳クラス(N = 24, 平均年齢 = 6.32, SD = .25)。4歳クラスには5歳、5歳クラスには6歳に達した子どもが含まれていたがクラスにより活動も異なることから保育園でのクラスを分析で用いる群分けとして用いることにした。便宜上、本稿ではそれぞれを4歳児群, 5歳児群と呼ぶ。

調査方法

保育園内の静かな部屋で実験者と個別に対面のかたちで調査を実施した。

調査・分析方法

日本と外国, そして, 英語の理解について下記のような質問(表1)をし記録した。調査実施前から子どもの反応がある程度予想できた項目に関しては, 記録シートに選択肢を用意し, 自由な回答を求めたものに関しては, 可能な限り要点をまとめて記述のかたちで記録した。項目2, 4, 7, 及び8は回答の自由度が高いことから, 発話内容を基に分類を行った(表2)。さらに, 量的変数として次の二つを算出して後の分析に使用した(国理解得点: 1~5の項目の合計点&英語理解得点: 6~9の項目の合計点)。

表 1: 幼児に尋ねた質問項目

質問項目
1 日本って知ってる?
2 日本って何?
3 外国って知ってる?
4 外国って何?
5 どこに住んでる?
6 英語ってなにか知ってる?
7 英語って何?
8 誰が英語を話す?
9 今何語で話してる?
10 英語を話すとかっこいい?
11 英語を習ってる?

表 2: 自由回答の例と分類の種類

質問	分類	回答の例
2 日本って何？	a表面的	旗 赤と白)
	b相対的	日本で)英語は話さない
	cその他 無回答	サッカーしている
4 外国って何？	a表面的	インド (か国のみ)
	b相対的	パナナ作る人がいる
	cその他 無回答	日本
7 英語って何？	a表面的	A, B, Cだよ
	b相対的	日本語は猿で英語はモンキー
	cその他 無回答	
8 誰が英語を話す？	a特定の人物	xx先生、外国の人
	b不特定多数	みんな
	cその他 無回答	ハロー

3. 結果

3.1 国についての理解

表 3: 国の理解についての質問における年齢群別の子どもの反応

	1.日本理解		2.日本は何？			3.外国理解		4.外国は何？			5.どこに住んでる？*理解の分類				
	Yes	No	a表面 的	b相対 的	cその 他 無 回答	Yes	No	a表面 的	b相対 的	cその 他 無 回答	日本	その他	両方	片方	理解 なし
4歳	10*	11*	2	2†	17	10	11	2**	1*	18	14*	7*	2	5	14
5歳	19*	5*	7	8†	9	17	7	2**	9*	13	23*	1*	12	11	1

χ^2 検定の結果, 日本を知っているかという問(問1) に対する答えの傾向に違いがみられた ($\chi^2(1) = 3.59, p < .01$). まず単純にわかると答える子どもと相対的な理解を示す子どもが5歳児群で多く, 4歳児群では理解していない者が多かった。

日本は何かについての問(問2) に対する自由回答の分類を分析したところ違いがあり ($\chi^2(2) = 8.68, p < .05$), 相対的な答えを返す子どもの割合が5歳児群では高い傾向, そして無回答は低いという結果が得られた。

外国理解については「外国」という言葉のみ(問3) では両年齢とも理解が困難であるようで, 理解できる子どもとできない子どもの人数に差が見られなかった ($\chi^2(1) = 1.64, n.s.$). しかし, 何かと説明(問4) をさせたところ, 答えられた人数は少ないものの年齢間で異なる傾向がみられた ($\chi^2(2) = 7.04, p < .05$). 5歳児群の相対的な反応の割合が高く ($p < .01$), 無回答の反応も低かった ($p < .01$). 現在どこに住んでいるかを尋ねる問(問5) は一見,

ナンセンスのようだが ($\chi^2(1) = 4.68, p < .05$)。4歳児群では全員正解できないことから難しい質問であることがわかるが、どちらの年齢群でも正解を言える割合が有意に高かった。

全体的な国理解得点を年齢別に比較したところ、5歳児群の平均点 4.25 (SD = 2.21) は4歳児の平均点 2.10 (SD = 1.64) よりも有意に高い ($t(43) = -3.67, p < .01$) ことが判明し、総合的に実年齢では4歳から6歳の間に国に関する理解が高まることがわかる。

3.2 外国語 (英語) についての理解

表 4: 英語についての質問における年齢群別の子どもの反応

	6.英語理解		7.英語何?			8.誰が話		9.今何語で話している?			10.かっこいい?			11.英語習っている?		
	Yes	No	Yes	No	dk	特定の人物	その他	日本語	その他	わからない	Yes	No	dk	Yes	No	dk
4歳	14	7	8	12	1	5*	16*	15	4	2	15	4	2	8	12	1
5歳	13	11	8	15	1	13*	11*	22	2	0	15	4	5	8	15	1

χ^2 検定の結果、英語を知っているか (問 6)、英語とは何か (問 7) についての問に対する反応は有意な差が見られなかった (それぞれ $\chi^2(1) = .03, n.s., \chi^2(2) = .00, n.s.$)。英語は誰が話すのかについての問 (問 8) では回答傾向に有意な違いのある傾向がみられた ($\chi^2(1) = .13, p < .10$)、4歳児では特定の人物が話すという理解が有意に低く、逆にその他の回答が有意に高かった。これに対して5歳児と真逆のパターンを示した。今何語で話しているかの問 (問 9) ナンセンスであるように思えるが、稀にわからない子どもがいた。しかし、この傾向に有意な差はなかった ($\chi^2(2) = 3.81, n.s.$)、正確確率検定を用いて年齢内での回答数を比較したところ、いずれの年齢でも日本語を話していると答えられる子どもが有意に多かった。

英語が話せるのはかっこいいか (問 10) を価値判断させる質問でも回答パターンに有意な差はなかった ($\chi^2(2) = 3.81, n.s.$) が、先の質問と同様に、正確確率検定を年齢毎にかけたところいずれの年齢でも「かっこいい」と判断している子どもが、「かっこよくない」や「わからない」と反応する子どもよりも多かった。

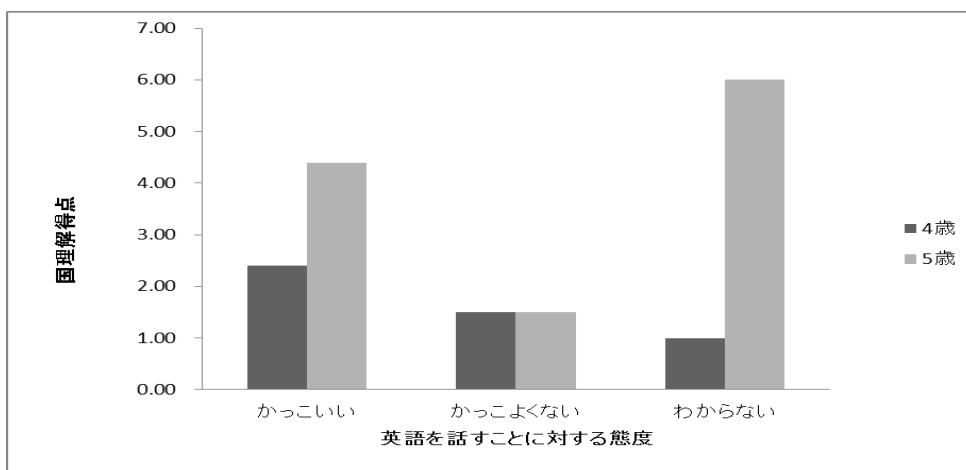
全体的な言語理解得点を年齢別に比較したところ、5歳児群の平均点 4.88 (SD = 1.36) は4歳児群の平均点 2.95 (SD = 1.32) よりも有意に高い ($t(43) = -2.06, p < .05$) ことが判明し、実年齢では4歳から6歳の間に英語に関する理解が高まることがわかる。

3.3 国や言語についての知識が外国語 (英語) に対する態度と関連するのか

英語がかっこいいかどうかという質問に対しての回答の違いにより国理解得点や言語理解得点が異なるかを年齢も要因に入れて分散分析を行った。

まず、国理解得点と英語に対する評価の関連の検討の結果 (図 1) を解説する。年齢 ($F(1, 39) = 12.44$)、回答の種類 ($F(2, 39) = 4.07$) の主効果、そして、年齢と回答の種類の交互作用 ($F(2, 39) = 3.53$) が認められた (全て $p < .05$)。多重比較の結果、4歳児 ($M = 2.10, SD = 1.64$) よりも5歳児 ($M = 4.25, SD = 2.22$) のほうが国理解得点が高いこ

図 1: 英語に対する態度と国理解得点の関連



とが示された ($p < .01$). 全体的に「かっこいい」と答える子ども ($M = 2.70, SD = 1.34$) のほうが「かっこよくない」と答える子ども ($M = 1.34, SD = 1.19$) よりも国理解得点が高いことがわかった ($p < .05$). 交互作用の多重比較の結果, 4歳児において回答別の得点に有意な違いはないものの, 5歳児においては, 「わからない」と答える子ども ($M = 3.60, SD = .55$) と「かっこいい」 ($M = 2.87, SD = 1.46$) と答える子どもは, 「かっこよくない」 ($M = 2.00, SD = 1.41$) と答える子どもよりも国理解得点が高かった (それぞれ $p < .05$ 及び $p < .01$).

4歳児では英語を話すことに対する態度は国や人々の理解と関連していないが, 5歳児ではそのような理解が高いほど「かっこいい」や「わからない」の判断がされることが示された.

言語に関する理解と英語に対する評価の関連の検討を行った結果, 年齢 ($F(1, 39) = 8.62, p < .01$) 及び回答の種類 ($F(2, 39) = 3.66, p < .05$) の主効果が認められた. 年齢と回答の種類との有意な交互作用はなかった. 多重比較の結果, 5歳児 ($M = 2.88, SD = .55$) のほうが4歳児 ($M = 2.05, SD = 1.32$) よりも得点が高く ($p < .001$), 全体的な回答の傾向と得点の関連については, 「かっこいい」と答える子どものほうが ($M = 2.70, SD = 1.34$), 「かっこよくない」と答える子ども ($M = 1.37, SD = 1.19$) よりも得点が高い ($p < .05$) こと, そしてその他の組み合わせ間では有意な差がなかったことがわかった.

英語に関する理解は実年齢, 4歳から6歳の間に増加すること, そして, 英語を話すことを「かっこいい」と評価する子供は「かっこよくない」と評価する子どもよりも英語に関する知識が高いことが示されたが, これについて年齢の違いはなかった. 追加の分析として, 英語を習っているかについての質問に対する回答を再分類し, 習っていると答えた子どもと, それ以外の回答, 「習っていない」, もしくは「わからない」の二種類にしたうえで, 英語を話すことに対する態度の種類との関連性を検討したが, 特に有意な関連性は

なかった。つまり実際に英語を習っているかによって英語を話すことに対する態度には違いがみられなかった。

4. 考察

本稿では、日本で育つ幼児を対象に外国や日本、英語についての知識と英語に対する態度を調べ、その発達的な変化と知識との関係を検討した。その結果、外国や日本に関する知識や外国語である英語に関する知識は全般的に4歳から6歳の間に伸びることが判明した。英語を話すことに対する態度については、4歳児群と5歳児群で差がなく、この時期の子どもは全般的に英語を話すことはかっこいいと評価していることがわかった。日本語についての質問を行わなかったため相対的な評価についてはわからない。しかし、乳児期から幼児期に一般的にみられる母語に対する選好が普遍的あるならば、外国語である英語を高く評価する傾向は日本社会の英語に対する価値観の表れだと考えられる。

さらに日本や外国についての知識、そして英語についての知識と英語に対する態度と関連を検討した。その結果、英語についての知識との関連では、「かっこいい」と評価する子どものほうが「かっこよくない」と評価する子どもよりも英語に関する知識が高いことが判明したが、年齢による違いはなかった。つまり、この年齢の子どもが英語を話すことをポジティブに評価する全体的な傾向はあるものの、英語についての知識を多くもつ子どものほうがよりポジティブに評価していることがわかる。日本の幼児は普段からなんらか英語についてのポジティブな情報を家庭やメディアといった環境から得ており、必然的にそのような知識の増加はよりポジティブな態度の形成に繋がるのであろう。

国理解得点と英語を話すことに対する態度との関係を検討した結果、全般的には、「かっこいい」と答える子どもの国理解得点が「かっこよくない」と評価する子どもよりも高いことが示された。これは英語の知識との関連をみたものと同様の傾向であった。しかし、4歳児群と5歳児群では異なる傾向がみられた点が興味深い。5歳児群でのみ、英語に対する評価によって国理解得点が異なることが示された。より具体的には、5歳児群で「わからない」と「かっこいい」と答える子どもは「かっこよくない」と答える子どもよりも国理解得点が高かった。このような傾向は英語理解得点との関連の検証ではみられなかったものである。この傾向の違いの原因を考えてみたい。英語理解得点を構成する質問がほぼ英語に関する知識であったのに対して国理解得点を構成した質問は総合的に日本と外国という相対的な知識を尋ねていた。つまり、国理解得点は日本含めた国々に関する相対的でより深い理解を反映しているものであったといえる。つまり5歳児群で「わからない」反応を示す子どもと「かっこいい」と思う子どもが同じ程度の国々についての知識があるのは、国やその人々について理解が高いがゆえに英語を話すことがかっこいいかと尋ねられても、評価の基準とするための必要な情報がないと考えるために生じる「わからない」反応である可能性が浮上する。4歳児群と5歳児群が「わからない」反応は全く違う意味をもつのかかもしれない。近藤(2014)は幼児の「わからない」反応の発達的变化とその内容を検討しており、幼児の「わからない」反応には、(1) 解決課題のために提示された情報が充分処理できなかつたがゆえのもの、と(2) 課題解決のために提示された情報

を充分処理したうえで、情報が足りないことを認識したゆえのもの、の二種類があることや、(2)のタイプものは年齢とともに増加すると主張している。このことから、本研究の5歳児群の一部でみられた「わからない」反応は(2)のようなタイプのものであったといえる。国や人々に関することを多く知っている子どもは国によってさまざまな文化があり言語が存在するという知識があったので英語を話すという行動を単純にかっこいいかどうか判断できる材料(情報)がないと気がついていたのかもしれない。

まとめると、基本的に日本で生活する幼児は英語を話すことに対してポジティブな態度が形成されており、おそらくそれは社会的な英語に対する価値観の影響によるものと考えられる。しかしながら5歳以降から、より深い国や人々の理解が高まるとともに闇雲に英語を話すことを過大評価しなくなる、つまり偏った態度が緩和されるようになることがわかった。

以上のことから幼児期から異文化理解を促進するためには日本の幼児は英語を過大評価する傾向が強く異文化に対する態度に偏りが生じやすいことを認識したうえで、人々や国々に関する多様な側面を含んだ現実的な知識が獲得できる教材や実質的な交流活動が必要であることを強調したい。

本研究では子どもの知識を子ども自身に尋ねたが英語学習経験や言語及び国の知識に関しては親に尋ねたほうがより正確な情報が得られると思われる。実際の海外旅行や海外滞在経験等も含めたより詳細な子どもの経験等も重要な情報である。本研究では英語が一番幼児が知っている外国語であることや高い早期英語教育への関心や英語学習を通じての異文化教育が当たり前となっている事実を踏まえ異文化の言語として英語を選択したが、当然のことながら英語以外の外国語の知識についても抑える必要がある。さらに内外集団の対比という観点から日本語についても尋ねる必要があるだろう。

参考文献

- Aboud, F. E. (2008). A social-cognitive developmental theory of prejudice. In Quintana, S. M., & McKown, C. *Handbook of race, racism, and the developing child*. John Wiley & Sons, 55-71.
- Apple, M. W. (2014). *Official knowledge: Democratic education in a conservative age*. Routledge.
- Bar-Haim, Y., Ziv, T., Lamy, D., & Hodes, R. M. (2006). Nature and nurture in own-race face processing. *Psychological Science*, 17(2), 159-163.
- Bar-Tal, D. (1996). Development of social categories and stereotypes in early childhood: The case of "the Arab" concept formation, stereotype and attitudes by Jewish children in Israel. *International journal of intercultural relations*, 20(3), 341-370.
- Bar-Tal, D., & Teichman, Y. (2005). *Stereotypes and prejudice in conflict: Representations of Arabs in Israeli Jewish society*. Cambridge University Press.

- Brosseau-Liard, P. E., & Birch, S. A. (2010). 'I bet you know more and are nicer too!': what children infer from others' accuracy. *Developmental Science*, 13(5), 772-778.
- Kinzler, K. D., Corriveau, K. H., & Harris, P. L. (2011). Children's selective trust in native-accented speakers. *Developmental Science*, 14, 106111
- Kinzler, K. D., Dupoux, E., & Spelke, E. S. (2007). The native language of social cognition. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 104(30), 12577-12580.
- Kinzler, K. D., Shutts, K., DeJesus, J., & Spelke, E. S. (2009). Accent trumps race in guiding children's social preferences. *Social cognition*, 27(4), 623.
- 近藤龍彰. (2014). 幼児期における「わからない」反応の発達的变化: 「わからない」状態の視覚化手続きを通して. *発達心理学研究*, 25(1), 38-46.
- Kutsuki, A. (2013). Selective Trust in Japanese Preschoolers between Foreign and Native Language Speakers. *TALKS*, 18, 45-52.
- Kutsuki, A. & Tanaka, Y. (in press). Factors affecting children's judgment of culturally deviant acts: Findings from an international school in Japan.
- Mehler, J., Jusczyk, P., Lambertz, G., Halsted, N., Bertoncini, J., & Amiel-Tison, C. (1988). A precursor of language acquisition in young infants. *Cognition*, 29(2), 143-178.
- Middleton, M. R., Tajfel, H., & Johnson, N. B. (1970). Cognitive and affective aspects of children's national attitudes. *British Journal of social and clinical psychology*, 9(2), 122-134.
- Moon, C., Cooper, R. P., & Fifer, W. P. (1993). Two-day-olds prefer their native language. *Infant behavior and development*, 16(4), 495-500.
- Nesdale, D. (2004). Social identity processes and children's ethnic prejudice. *The development of the social self*, 219-245.
- 斎藤兆史. (2001). 日本人のための英語. 講談社, 26 (12), 29-31.
- Shutts, K., Kinzler, K. D., McKee, C. B., & Spelke, E. S. (2009). Social information guides infants' selection of foods. *Journal of Cognition and Development*, 10(1-2), 1-17.
- Schleicher, K. & Kozma, T. (1992). *Ethnocentrism in education*. P. Lang.
- Teichman, Y., & Bar-Tal, D. (2008). Acquisition and development of a shared psychological intergroup repertoire in a context of intractable conflict. In Quintana, S. M., & McKown, C. *Handbook of race, racism, and the developing child*, John Wiley & Sons, 452-482.
- 塘利枝子. (1999). 子供の異文化受容: 異文化共生を育むための態度形成. ナカニシヤ出版.

山本卓. (2009). この授業は何を目指すのか?: 小学校英語教育における曖昧性の問題. 外国語教育フォーラム *Forum of Language Instructors* (Vol. 3, pp. 49-63).

Author's web site: <http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2016 年 1 月 10 日)